

漢法苞徳塾資料	No. 019
区分	入門講座資料 治療・臨床
タイトル	温病について
著者	八木素萌
作成日	

◎温病と傷寒

『素問』熱論第31に「熱病ハ皆傷寒ノ類ナリ」「人ノ寒ニ傷ラルルヤ則ワチ病熱ヲ為ス……」「……凡ソ傷寒ヲ病ミテ温ト成ル者ハ 夏至ノ日ニ先ズル者ハ病温ヲ為シ 夏至ノ日ニ後ルル者ハ病暑ヲ為ス……」などとあり、『難経』五十八難には「……傷寒ニ五有リ 中風有リ 傷寒有リ 湿温有リ 熱病有リ 温病有リ……」と記述されており、『傷寒論』巻第2・傷寒例第三には「其レ四時ノ氣ニ傷ラルレバ 皆能ク病ヲ為ス 傷寒ヲ以ッテ毒ト為スハ 其ノ最モ殺腐ノ氣ト成ルヲ以ッテナリ 中リテ即病ノ者ハ 名ンデ傷寒ト曰ウ 即病マザル者ハ 寒毒ノ肌膚ニ藏レテ 春ニ至ッテ変ジテ温病ト為ル 夏ニ至ッテ変ジテ暑病ト為ル 暑病ハ 熱極マリテ温ヨリ重キナリ 是レ以ッテ辛苦ノ人ノ 春夏ニ温熱病ノ多キ者ハ 皆冬時ニ寒ニ触ルルニ由リテ致ス所ニシテ 時行ノ氣ニアラザルナリ」と記述している。

「傷寒」と言う語には広い意味で用いられる場合には「外感病」の総称としての意義と、狭い意味で用いられる場合の「……中リテ即病ノ者ハ 名ンデ傷寒ト曰ウ……」と表現されているものを指している意義とがある。後代には「時行ノ氣」によって病む者も、「湿温」病も「温熱」病も「温病」も、『温病論』（温病学とも言う）の中に包摂されるようになったが、「傷寒学派」と「温病学派」の論争過程によって、このように分類理解されるようになった為である。

◎温病論の形成

『温病論』は、かなり長期に渉たる歴史を経て次第に出来上がったものである。金元時代に準備され明清に成立発達した。金元時代の「準備」された様子は『医経廻洄集』（元・王安道）に「夫惟世以温病熱病混称傷寒…以用温熱之藥 若此者 因名乱実」「温病不得混称傷寒」「辨其因 正其名 察其形」と記述されていて、良く反映されている。この時代は都市への人口の集中と大勢の移動が『傷寒論』の臨床課題に照らした研究を突き動かしたとされている、『傷寒直格』（金・劉完素）が熱病に対する「寒涼」剤の運用を説いた事から「傷寒宗仲景 熱病主河間」と言われるようになった。「寒涼派」または「益水派」とも呼ばれた「劉完素」（河間）のみならず、「攻下派」とされる「張從正」（子和）、「補土派」とされる「李杲」（東垣）、「養陰派」と呼ばれた「朱震亨」（丹溪）などの業績は、理論と臨床の両面において『傷寒論』の論じ足りなかった部分を補った。こうして明清の時代の医学的達成へと時代が進む事になった。『温病学』の成立期の業績を概括したものとして『温熱経緯』（王孟英）があり、完成期に全体を通じて概括したものとして『温病正宗』（王德宣）がある。

◎温病論の弁証（衛気榮血弁証と三焦弁証）と傷寒論の弁証との関係

『温病学』上の重要著作である『温熱論』（別名・外感温熱篇・温証論治）（葉天士）は「温邪上受 首先犯肺 逆伝心包」と重要な問題を提出し、また「衛之後方言気 榮之後方言血」と在来の衛気・榮血の論を大幅に前進させ、「在衛汗之可也 到気才可清気 入榮猶可透熱転気 …入血就恐耗血動血 直須涼血散血」と記述して「衛」分・「気」分・「榮」分・「血」分の病位での治療原則を明らかにした。また、同様に重要な文献である『湿熱条辨』（別名・湿熱病篇）（薛生白）には「湿熱之邪從表傷者十之一二 由口鼻入者十之八九」湿熱の病は「属陽明太陰經者居多」とも記述し、湿邪が表にあるときは「透」法（芳香剤を用いて透泄させるのであるから「回気」により湿を水に轉換させて排泄させる事になる）を施し、湿邪が裏に入ったときには上焦にあるのか中焦なのか下焦にあるかを診別して異なる治法を行なうべき事を論じ、湿邪が「燥」化したり「熱」化して「榮血」に入ったら治療は一般の「温病」「熱病」と概ね同様となる事も論じている。これを承けて後に『温病条辨』（呉鞠通）は三焦の辨証問題を病証論的に解明し、上焦には心と肺とを配し、中焦には脾胃を配し、下焦には肝腎を配し、「温病」の発展過程、経過は上焦から中焦に伝入して下焦に終る事を論じ、下焦の病の治療の基本方剤として「加減復脈湯」を開示した。これを「高等中医学院教学参考叢書・『温病学』」は「この三焦の辨証と治法の綱領的な提示は、温病学の成立を終らせ衛気榮血と三焦の弁別と治則を以て温病の辨証論治の体系の核心的なものとなった」と評価している。

「入門講座資料（'90・6・10）辨証の概略」の述べたことを以下に再録する。

☆温病論の基本薬方と、衛気榮血辨証と六經辨証の関係

- (1) 『温病条辨』（呉鞠通）には「臟腑ヲ以テ雜病ヲ論ジ、六經ニ傷寒ヲ論ジ、衛気榮血ト三焦ヲ以テ温病ヲ論ジル」と言う。

また温病の《基本方剤》として

「☆病在衛分治銀翹散或桑菊飲」

「☆病在気分治以白虎湯或承気湯」

「☆病在榮分治以清宮湯或清宮湯」

「☆病在血分治以犀角地黄湯」

と記述している。

- (2) 『衛気榮血辨証』（天津中医学院）に「温病学説は〔内經〕に淵源し、〔傷寒論〕に孕育（養育）され、金元に発展し明清に形成された」と述べている。
- (3) また、「温病の衛気榮血辨証は、傷寒の六經辨証の基礎の上に、これを補充し発展させて出来上がったものである、両者の間には少なからず共通する所がある。例えば衛気榮血辨証での‘衛分証’‘気分証’の‘証型’には、六經辨証による‘太陽病’や‘陽明病’に相当するものがあり、また「傷寒」の寒邪が裏に入って‘陽明’の熱症に転化すると、これはもう温熱の証である、これは温病の‘気分証’と基本的には同じである。」「生理と病理から言えば、‘太陽’は表を主り、‘太陰の

肺’は竅を鼻に開き外には皮毛に合っして気を主って衛を属せしめており表を主っている、故に六経辨証の‘太陽病’の場合には必ず肺に深く関係がある。‘衛気栄血辨証’の論に〈温邪上に受くれば^{はじ}首めに先ず肺を犯す〉と言うが、この理論でもまた‘太陽’に及んでいる。故に‘傷寒太陽病’も‘温病気分証’もともに表証を表わすものである。』と記述している。

- (4) さらに「衛気栄血辨証というものは六経辨証の綱領の啓発と影響のもとで、外感熱病の辨証問題の理論的不足を補充したものである。両者の関係は、六経辨証は基礎であり、衛気栄血辨証はその発展であって、不可分の関係にあるものである。」と言う。

◎傷寒の基本病証と温病の基本病証

別資料参照

「六経辨証の基本的な事柄」

「傷寒の治療と温病の治療の相違」

「各種辨証一覧表」(表裏辨証表・寒熱辨証表・虚実辨証表・六経辨証表)

(衛気栄血辨証表・三焦辨証表—————)

☆五臓辨証については、『素問』蔵気法時論第 22・調経論第 62 などを中心として考える。

☆経脈辨証については、『靈枢』経脈第 10 を中心とするが、『内経』全般の経脈に関して記述されている部分の全体について、研究の上で、再構成の作業が進められる事が必要である。経脈第 10 の記述の問題性を指摘する論が、近年かなり提起されているからであり、流注の理解と経脈の運用との面で「固定的観念」に「自らの手足を縛られない」ことが必要であり、「経病」概念にも不明瞭な部分が少なくないからでもある。

☆『傷寒論』は正式には『傷寒雑病論』と言い『傷寒論』と『金匱要略』とで構成されている。『金匱要略』は「雑病論」と言われる事もあるように「雑病」を論じ「五臓辨証」を基本として「雑病」に対処している。

◎寒温統一論の台頭の意味

「八綱辨証」つまり「陰・陽・虚・実・寒・熱・表・裏」の八綱目の角度で病症を整理して、六経の病位に把握を集約するのが外感病の「傷寒」の辨証であるが、「雑病」は「八綱」によって弁別したものを「五臓」的に集約する事を軸として「六経」も考慮する辨証によって対処している。『傷寒論』には「厥陰病」の記述があるのに、それに応ずる薬方がほとんど記述されていないのは、良く知られている。『温病』にあっては「荣分」「血分」の治療が大きな問題で、これは、「陰」(津液・荣・血)の「臟腑」(特に脾・肝・腎)での病邪の所在と症候に対応するものであるから、『傷寒論』的には「厥陰病」の理論と密接に関連しているのである。

中国医学は清代以後には「西洋」的な「近代医学」と強く競合してきたが、この過程で「瘀血」研究が進み『血証論』(唐宗海〈容川〉)が記述されている。この「瘀血」研究の「論」と「治療」が

『温病学』の「榮分」「血分」論を一層補充した。それは、やはり『傷寒論』の「厥陰」病症への対応も強化することともなった。

「天津中医学院」の『衛氣榮血辨証』が指摘しているような関係が、理論と歴史上の学統とに在るのであるから、「傷寒学派」と「温病学派」との論争の過程でこのような関連性が意識されて来たのであるから、両者の理論と方法とを、整合的なものとして論理的な統合の問題として意識する傾向を生むこととなるのは必然的である。この系譜の近時の達成としては、万友生の『寒温統一論』（上海科学技术出版社）を挙げて置かなければなるまい。

◎結語

『傷寒論』と『温病論』の関係を通観すると関係が密接であるばかりでは無く、臨床的課題に対する医学的な取組みの歴史の中から発達したものであって、唐宗代から金元時代を経て明清にいたる医学の歴史も考慮しない訳には行かなかった。この歴史は「外感病」への対応の論が『温病学』形成の全過程において仕上がったのみでは無く、「内傷病」への対応にも長足の進展も見せている、「内傷病」が発症する仕組みと契機に関する認識が明瞭に発達した事を示している。故に臨床家としては、この理論と臨床的蓄積の歴史を研究しなければならない。そして『現代中医学』はかかる歴史的背景をもとに成立しているが、いまだに多くの未解決な課題を抱えている事を推測させる。『中医学』の受容の問題では、その前史つまり明清代の医学史・学説史の検討を抜きには出来ないであろう。これは、日本が独自の立場で、漢法医学を理論的系譜の変遷史として研究して、その問題性と今後の課題とに、取り組むという事の必要性が痛感される。その為には『内经』『傷寒論』などを万古不易の聖典として神格化し絶対化する態度の克服が必要である。そこで幕末の考証学派の成果を十分に踏まえる事の重要性を痛感される。

鍼灸の学術においては、新時代への創製を達成しなければならない問題としての立場からの、理論と臨床の両面での取組みが必要となっている。